子どもの交流様態と場の構造

—フリースクールの建築計画に関する研究 (2)—

THE GROUP DYNAMICS OF CHILDREN AND THE STRUCTURE OF
THE PLACES COMPOSED BY THEM

A study on architectural planning of "Free Schools" Part 2

垣野義典*, 須田真史**, 初見 学***, 長澤 泰****

Yoshinori KAKINO, Masafumi SUDA, Manabu HATSUMI
and Yasushi NAGASAWA

This paper is the second in a series of a study about architectural planning of "free schools". They provide places for students who do not want to go to ordinary schools. In these spaces various self-controlled activities are carried out by children in various age-groups. The aim is to clarify the group dynamics of children and The structure of place composed by group dynamics, by using the method of Cluster analysis, studying the flow of their activities, and classifying their flow patterns. The result of field surveys and analysis are as follows; The group dynamics are classified into 9 patterns by the style of the group process. Besides, the patterns can be reduced to 4 types by two points, that a child forms a group or not and that he is interested in the other children or not. These types are related deeply with places for group activities, ones for individual activities in groups, or quiet ones for individual ones.

Keywords: Free school, Children, Group dynamics, Cluster analysis,

The structure of the places composed by group dynamics

フリースクール、子ども、交流様態、クラスター分析、場の構造

1 研究背景と目的

本稿は、フリースクールの建築計画に関する一連の研究の第二稿にあたる。近年、不登校生徒数の増加とともに、民間で新たな教育を模索する運動が活発化している。フリースクール¹⁾は、その代表的な例として位置づけられ、二つの側面をもっている。一つは不登校生徒の居場所、もう一つは学校にかわる教育の場という側面である²⁾。2002年9月、文部科学省より、不登校の子どもが通うための公立学校、つまり公立フリースクールの開設計画に関する発表があった³⁾。これまで同省は、不登校児童の学校復帰を念頭においてきた。この発表は、不登校の子どもの学校復帰を促すものではなく、学校以外の学びの場で、子どもが学び成長できる選択肢を容認する形となった。今後子どもをとりまく学びの環境は、新教育指導要領に代表される学校内の変革のみならず、学校外においても、ますます多様化するであろう。

フリースクールの最大の特徴は、異年齢の子ども達が、各自の興味、関心にそって、子ども自身が自主的に学習内容を、随時作り出すことにある。前稿³⁾では、子どもの校舎内での活動内容、活動の際の人数構成といった実態を、スペースの使用状況とあわせて明らかにし、必要と思われるスペースの性質に関する知見を得た。しかし、子ども達は1日の中で、互いの活動に影響を与えながら、時々刻々変化する校舎内の状況に合わせて、活動内容を変え、使用するスペースを変える。つまり、他の子どもとの関係の中で活動している。よって、子ども達

がどのような関係の中で活動を行っているかと考えた上で、フリースクール校舎の空間構成と子どもの活動の関係を論じる必要がある。社会学や心理学では、集団や集合体、群衆など、人の様々な集まりの様態について研究されている。Goffman⁴⁾は、人が集まる公共の場において、他者と居合わせた場合、人がいかにふるまうか、その様態を捉え、いかに公共の秩序が保たれているか言及した⁵⁾。学校の児童に関係するものでは、学級集団におけるソシオメトリック構造や児童の集団意識と学年の関係を明らかにしたものもある⁶⁾。

学校建築計画の分野では、柳澤が、小学校のオープンスペースにおいて、クラスごとにテリトリーが発生する様相をとらえ⁶⁾、伊藤らは、児童の状況に合わせたふるまいとグループ構造の関係に着目し、子どもが形成するグループと空間的しつらえとの関係性について明らかにしている⁷⁾。これらはいずれも、小学校という、時間割に沿って教師にある程度コントロールされた環境下で、同年齢の子どもで構成されるクラスや学年単位の中での子どものふるまいをとらえたものである。では、フリースクールという、時々刻々スペースの使用状況が変化し、しかも異年齢の子ども達自身の手で作られ、自由に活動できる環境にあって、子ども達はどのような関係を築いているであろうか。そして、この子ども同士の関係は、建築空間とどのような関係にあるであろうか。本研究ではこの視点にたち、子ども同士の関係と空間構成の関係を明らかにすることを目的とし、まず、子ども一人一人が他の子ども

* 東京理科大学理工学部建築学科 助手・博士(工学)

** 日本学術振興会科学技術特別研究員/

国立保健医療科学院施設科学部 博士(工学)

*** 東京理科大学理工学部建築学科 教授・工博

**** 東京大学大学院工学系研究科 教授・工博

Research Associate, Dept. of Archit., Tokyo University of Science, Dr. Eng.

Researcher, JSPS/

Dept. of Facility Science, National Institute of Public Health, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Archit., Tokyo University of Science, Dr. Eng.

Prof., Graduate School of Engineering, The University of Tokyo, Dr. Eng.

とどのような関係を築いているか、その様子を一日の活動の流れの中でとらえることに焦点をあてる。そして、子ども同士の関係からみたフリースクールという場²⁾の構造と、前報で導いたスペースに関する知見³⁾との関係を明らかにする。さらに本研究は、未だ絶対的価値として認識され続けている学校教育やそこの子どもの活動を、相対化することを目指している。

2 研究の概要

2-1 研究方法

まず、子ども同士が一日に何分間活動をともにしたかを指標として、誰と誰がどのような関係にあるか、つまり誰と誰と一緒にいる時間が長く、誰と誰が交流していないか、その様相をとらえ類型化する。この類型化したものを交流様態とよぶことにする。そして、各交流様態間にどのような関係性があるか明らかにする。

2-2 調査概要

前稿に引き続き、調査対象はSS、OS、UB、EMの4事例である。調査期間は2000年6月19日から7月5日、調査日数はSSが5日、OSは3日、UB、EMは4日間(表1)、フリースクール内での子ども達の活動内容や、どのスペースで誰が誰と一緒にいるか、その交流の様子をとらえることを目的として、行動観察調査を行った。調査時間は11:00~18:00、10分間隔で、1/100の平面図上に記録した。SS(図1)は、ホールを囲むように、家具で仕切られたスペースが配されている。OS(図2)は、1階がホールとキッチン、二つの部屋からなり、2階は4部屋とそれらをつなぐ廊下からなる。UB(図3)は、ホールとそれを囲むように配されたスペースからなり、4事例中、延べ床377㎡と最大の面積を有する。EM(図4)は、8~10畳の3部屋とそれらをつなぐ廊下からなり、延べ床面積は4事例中最小の54㎡である。図5に、各日の子どもの登校人数を示す。延べ床最大のUBと最小のEMで、登校人数に開きがほとんどないことがわかる。

3 子ども同士の交流様態

3-1 交流様態の類型

最初に、子ども一人一人が、他のどの子どもと何分間活動をともにしたかカウントし、これをもとにクラスター分析(Ward法)を行った。通常、クラスター分析を行う場合、クラスターを決定するためにストップラインを引く必要がある。そこで、行動観察結果と照らし合わせ、相対的に頻度高く交流のあった子ども同士がクラスターを形成できているか、詳細に検討した。さらに、一人で居ることの多かった子どもが、特定の子どものみと交流のある子ども、もしくは幅広い交流を行う子どもと、同一クラスターを形成していないか等も検討し、行動観察結果に準じる所でストップラインを引いた。結果、クラスターは4種に分類できる。具体的に各類型の特徴を述べる。図6において、SとIは同一のクラスターを形成している。実際には、本人同士はほとんど交流がなかったが、PやMとのみ、選択的に交流を行う点で共通している。よって、このタイプを「選択的交流型」とした。また、F、Q、Uは、ある特定の子どものみと、グループを形成するほどの高い頻度で交流をしない、もしくは一人で居ることが多かった。このタイプを「グループ非形成型」とした。なお、ここでの「グループ」とは、一日の中で一緒に活動する時間が非常に長く、相対的に密な関係を築いてるとみなされる子どもの集まりをさす²⁰⁾。次に、PやMは、多くの子どもと比較的高い頻度で幅広い交流を行う。よって、このタイプを「社交型」とした。J、T、Oは互いに交流する頻度が高く、「グループ形成型」とした。

表1 調査事例概要

施設名	SS	OS	UB	EM
活動開始年	1995	1994	1988	1973
所在地	東京都新宿区	東京都大田区	千葉県柏市	東京都江戸川区
施設	1	2	2	1
利用施設	オフィス	保育園	フリースクール	住居
延べ床面積(㎡)	147	202	377	54
敷地面積(㎡)	-	240	1300	87
活動曜日	月~金	月~金	月~木	毎日
活動時間帯	10~18 (水曜日のみ 13時開始)	10~17 (水曜日のみ 13時開始)	10:30~17:30 (水曜日のみ 13時開始)	何時でも
在籍できる年齢	6~20	6~20	5~18	制限なし
在籍者数	60	30	41	59
小学生	15	12	23	3
中学生	20	5	11	18
高校生	-	-	7	22
18歳以上	25	13	-	15
常勤・非常勤 スタッフの人数	3	2	4+2	2+5
プログラム	注4 参照			なし
調査日数	5日間	3日間	4日間	4日間
調査月日 (調査年: 2000 年)	6月26日~30 日 すべて 観測	6月19日、22 日、23日 観測	6月19日、20 日、21日、22 日 すべて観測	6月19日~21 日、7月5日 すべて観測

図1 SS平面図

図2 OS平面図

図5 一日の登校人数

図6 クラスター分析結果の例
(EM 6月19日) と各クラスターの特徴

3-2 交流様態の日による変化

クラスター分析結果から、各事例ごとに、交流様態の日による変化をみている。伊藤は、文献7で、小学校児童が「なかよしグループ」で行動する、つまりグループは定常的であるとの視点から、クラスター分析によって児童のグループ構造を明らかにしている^(注6)。さらに「男女混合の集まりが、(計9日間の調査において)数えるほどしか見られなかった」と述べている。しかしフリースクールでは、図7~10に示すように、子どもの交流様態は、個人で一定しておらず、さらに男女、異年齢混合のグループが各日に見られる。これは、学校では見られない現象であり、フリースクールの大きな特徴である。具体的にみてゆくと、各日ともグループを形成しているのは1~3組程度で、その人数規模は2、3人が多い。人数規模は大きくても5、6人である。EMでは、誰もグループを形成しない日が多い。また個人に着目すると、図7に示すSSのAくん(社交型)やGくん(グループ非形成型)のように、各日で交流様態が一定している子どもがいる一方、SSのHさんのように、日によって交流様態が変化する子どももいる。各グループの性別構成をみると、SS(図7)、OS(図8)では男女混合のグループが、ほとんどの日にみられる。UB(図9)は、6月29日以外は男子もしくは女子のみ、EM(図10)では男子のみでグループが構成されている。次に、年齢構成をみている。SS、OSでは、非常に年齢のはなれた子ども同士がグループを形成することがある。例えば、SSの6月26日のように、19歳の子どもと10歳前後の子どもが同じグループを形成する場合である。

3-3 各交流様態の事例

次に、3-1で行った類型結果をもとに、交流様態の事例をあげ、具体的に各特徴を述べる。なお、各交流様態の図に関して、図11を例にとって説明する。上段は、各時刻に、各スペースを何人が使用している、その時刻にMさんがどのスペースにいるか表している。つまり、Mさんがどのような状況下で、スペースを使用しているか表している。下段は、Mさんが各時間に、何人でどのような活動を行っているか表している。

図11 選択的交流型(SS-6月27日 Mさん 14歳 / Aくん 11歳)

図12 MさんがAくんと交流していない場面

図7 SSにおける交流様態の日による変化

図8 OSにおける交流様態の日による変化

図9 UBにおける交流様態の日による変化

図10 EMにおける交流様態の日による変化

□A 選択的交流型 特定子ども、主に社交型の子どもと選択的に交流するタイプである。図11に示すSSのMさんは、1日の自由時間中ほとんどを、社交型のAくんと一緒に過ごしている。Aくんは、11時～13時に見られるように、他の子どもが行っている活動に興味を示し、様々なスペースを行き来しながら、幅広く子どもと交流している。一方Mさんは、他のスペースで行われている活動、例えば、キッチンで12人分の昼食を作る、ソファコーナーでの中国語の授業などにはほとんど興味を示さない。また、Mさんが、Aくんと交流していない場面を図12に示す。登校直後は登校した挨拶を兼ねて、スタッフルームでスタッフと会話したり、英会話の授業に参加している。しかし、それが終了するとAくんと一緒に活動しており、MさんにとってAくんが活動の起点となっている。

□B グループ非形成型

■B-1 個人活動中心居合わせ型 1日の活動時間の大半、個人的な活動を中心に行いながら、その場に居合わせた子どもと交流するタイプである。図13に示すEMのQさんは、1日の内、多くの時間を読書やキーボードを弾くなどして一人で過ごしている。しかし、その過ごし方は時間によって質が異なる。つまり、図14に示すように、完全に一人になれるスペースを選んで使用する場合と、複数の子どもの中に身を置いて個人的な活動を行いながら、そのスペースに居合わせた子どもと交流を行う場合である。Qさんは、他の子どもと積極的に交流する訳ではないが、パソコン部屋のように、常に複数の子どもが過ごすスペースに、関わりを求めて身をおいている。

■B-2 個人活動集中型 1日の活動時間の大半、他の子どもと積極的な交流は行わず、個人的な活動を中心に行う。同時に、他の子どもと居合わせることの少ないスペースを使用するタイプである。図15に示すUBのWさんは、食材の買い出し時や昼食時間をのぞくと、1人か少人数で活動することが多い。図16に示すようにプログラムとして設定されている勉強の時間や、16時以降のプール、ホールでの野球といった、その時間における他の子どもの活動には全く関わらず、自分の活動に集中している。Wさんのように、自分の関心事が見つかり、その関心事に時間を費したい場合、他の子どもやスタッフは干渉せず、見守っている。

■B-3 短時間登校交流型 フリースクールでの活動時間が1時間未満^{注7)}で、かつ他の子どもと交流を行うタイプである。このタイプには、通常学校に通い、その下校時にフリースクールに立ち寄る場合や、他に用事があって下校する場合、その日のフリースクール内の状況があわずに下校する場合がある。例えば、その日に登校した子どもの数が多く、にぎやかな場合、これを騒々しいと感じ自分の関心事に集中できない場合や、逆に少数の子どもしか登校せず、静かな雰囲気を感じて下校する場合がこれにあたる。

図17に示すSSのCさんは、この日、他に用事があったため、14

図17 短時間登校交流型 (SS 6月26日 Cさん 18歳)

図13 個人活動中心居合わせ型 (EM 6月20日 Qさん 15歳)

図14 Qさんの交流場面

図15 個人活動集中型 (UB 6月26日 Wさん 12歳)

図16 Wさんが誰とも交流していない場面

図18 Cさんの交流場面

時30分に登校し15時20分に下校している。その間、4、5人の子どもとおしゃべりしながら昼食をとっている。図18に、Cさんが交流している場面を示す。Cさんは、登校直後、キッチンでおしゃべりをしてZくんとDさんに話しかけながら、おしゃべりの輪に参加し、昼食を取り始めた。その後、Zくんと2人でおしゃべりをしている所へ、Tが参加する。キッチンは、ホールや各コーナーから、誰が何をしているか、その様子がよく見えるため、他の子どもが立ち寄りやすくなっている。また、1人でお茶を飲んでいると、スタッフが話しかけてくる。このように、Cさんは、昼食やお茶を飲むという活動をきっかけとして、子どもやスタッフとの交流を行っている。Cさんのように登校時間が50分間であっても、子どもは、様々な子どもやスタッフとの交流を求めて登校してくる。

■B-4 短時間登校個人活動型 フリースクールでの活動時間が1時間未満で、かつ他の子どもと交流をほとんど行わないタイプである。図19に示すUBのVくんは、この日15時20分に登校し、ロフトにある読書コーナーでじっと何か考え事をし、15時50分に下校している。スタッフからは、「誰にも邪魔されず一人でいられる場所」として、フリースクールに立ち寄る子どももいる、というコメントが聞かれた。Vくんの登校時間中、他の子どもは、プログラムに参加したり、ビーズ遊びやローラーブレードをしている。しかし、Vくんは、ほとんど関心を示していない。

■B-5 プログラム活動中心型 プログラム活動に積極的に参加して1日を過ごすタイプである。図20に示すOSのGさんは、1日のうち半分以上の時間を授業やミーティングといった、プログラム活動に参加して時間を過ごしている。自由時間中は、OSが発行している雑誌の編集作業に参加するなど、他の子どもとの交流も活発である。一方、bさんは英会話の授業開始直前に登校し、授業が終了すると下校している。このように、プログラム活動に積極的に参加する子どもでも、そのフリースクールでの活動内容が異なる。つまり、Gさんのように、フリースクールで一連の活動の中でプログラム活動に参加する場合と、プログラム活動の参加が目的で登校する場合である。

□C 社交型 特定の子どもとグループを形成するのではなく、多くの子どもと幅広く交流するタイプである。図21に示すOSのAくんは、1階のホール中央、スタッフルーム、テレビゲームコーナーを中心に、数人でおしゃべりやカードゲームをしたり、大勢でテレビゲームやたこ焼きを作るなどして過ごしている。他の子どもやその活動に関心があり、スペース間を行き来しながら、他の子どもの活動に

図21 社交型 (OS 6月22日 Aくん 13歳)

図19 短時間登校個人活動型 (UB 6月29日 Vくん 15歳)

図20 プログラム活動中心型 (OS 6月22日 Gさん 16歳)

参加する。1日の活動のなかで、一人で活動している時間がほとんどない。図22にAくんの交流場面を示す。2人～12人まで幅広い人数構成をとりながら、多くの子どもと交流している。

□D グループ形成型

■D-1 グループ単位型 特定の子ども同士、ほぼ常にグループ単位で活動するタイプである。図23に示すSSのhくん、iくん、jくんは、昼の間を中心に、三人で、グループ単位で活動している。特にhくんとiくんは、一緒に登校し下校までの間、ギターを弾いたり麻雀をするなど常に一緒に活動している。このグループを形成する子ども達の中で共通の関心事があり、他の子ども達と交流するよりも、その関心事に時間を費す。他の子どもとは、ほとんど交流がなく、他のス

図22 Aくんの交流場面

ペースで行われている活動にもほとんど関心を示さない。

■D-2 グループ編成型 ある時間は、個々バラバラに活動しているが、ある時間はグループを形成して活動するタイプである。図24に示すOSの、Bくん、Eくん、eくんは、1階のホール中央、ソファコーナー、テレビゲームコーナーといった、各自の姿が見えるスペースで主に活動している。16時には、Bくん、Eくんは一緒にカードゲーム、eくんは読書をしており、その時の状況に応じて、ある時は2人、ある時は3人でグループを形成して活動している。また、図25に3人がばらばらに活動している時の交流場面を示す。Eくんはfくんと2階の和室でカードゲーム、eくんはHさんとソファコーナーで工作、Bくんはホールで4人でカードゲームをしている。3人は、グループを形成して活動する時間が長い、他の子どもやその活動にも関心がある。そして、その時の関心事や使用したいスペース、交流したい相手によって、個々バラバラに活動することもある。

3-4 交流様態の類型結果

以上の分析結果より、グループ形成型はグループ単位型とグループ編成型の2種に、グループ非形成型は、個人活動中心居合わせ型、個人活動集中型、短時間登校交流型、短時間登校個人活動型、プログラム活動中心型の5種に細分類できる。

また、グループの形成、つまりある特定の子どもとの結びつきの強さと、他の子どもやその活動内容への関心、という2軸から、各交流様態を分類し直すと、表2のように大きく4種に分類できる。すなわち、特定の子どもと交流することなく、また他の子どもへの関心も低い「単独活動充実型」、特定の子どもと主に活動し、他の子どもへの関心が低い「グループ活動充実型」、特定の子どもと交流はしないが、他の子どもへの関心が高い「関心交流型」、特定の子どもと交流するが、他の子どもへの関心も高い「積極関わり型」である。

4 交流様態と空間の関係

4-1 交流様態の発生と空間の質との関係

SSは、図17からわかるように、比較的どの時間帯もスペース全体が使用され、多数の子どもが一つのスペースを長時間使用し続けることは少ない。子ども達は、他のスペースで行われる活動を把握しつつ、自分の活動を行っている。OSでは図21からもわかる通り、2階が比較的少人数での活動、1階が主に複数の子どもが各自場所を選択しながら活動を行っており、状況に合わせた空間選択が可能である。また、1階ホール内は開放的な空間であり、直接交流していない子ども同士も、互いの活動を把握しながら活動ができる。SSやOSでは、開放的な空間で活動する子どもも、家具やコーナーをより所に、他者と適度に心理的な距離をおいて活動することも可能である。そして、自分の関心事が発生した場合、その活動に加わることも容易である。UBは図15、19からもわかるように、各時間において1、2カ所の空間に人数が集中し活動する傾向がある。それ以外の空間では、ごく少人数の子どもが活動するか全くの未使用状態となる。このため、自分の活動を行う中で他者と居合わせる機会が少ない。登校人数に対して大規模な空間は、一人一人の子どもが空間を広く使用することができ、利点は大きい。しかし、どこかの空間でどのような活動が行われているか、把握が困難となる。他者と一緒に活動し始め、一端その輪から抜け出してしまうと、なかなか他者の活動に加わるのが難しい。それ故、意図的に他者と活動をともにするようになり、子ども同士の交流関係の固定化が促進されることもある。

EMは、4事例中延べ床面積が最小であるが、UBと同程度の人数子どもが通ってくる。図13にみられるように、各部屋は常に複数の

図23 グループ単位活動型 (SS 6月27日 hくん16歳、iくん16歳、jくん17歳)

図24 グループ編成活動型 (OS 6月22日 Bくん7歳、Eくん11歳、eくん11歳)

図25 Bくん、Eくん、eくんのグループを形成していない時の交流場面

表2 グループ形成と他の子どもへの関心

子どもがにぎやかに活動している。このため、一人で活動している子どもにとって、他者と居合わせやすく、交流が発生しやすい。登校人数に対して小規模な空間は、子ども同士の関わりを促進しやすいといえる。しかし、子どもは他者の活動に直接関わらずとも、適度な距離を保ちながらフリースクール空間内で活動している。他者と場所を共有するか、他者の視線から完全に離れるかといった、2択的な空間の選び方ではなく、他者からは物理的にもやや距離をとることができ、かつ他者の視線に触れるような空間選択も重要であろう。総じて、一人一人の子どもが、他者と適度に距離を保ちながら、様々な交流が行えるよう空間の規模や質を設定することが重要である。

4-2 交流様態とスペースとの関係

4-1の考察内容をふまえ、各交流様態と前報で導いた3種のスペースとの関係を表3に示す。「複数人で活動できるスペース」すなわち、SS、OSのホールやEMのパソコン部屋のように活発な交流が行われる空間と関係が強いのは、C社交型、A選択的交流型、D-2グループ編成型、B-3短時間登校交流型の4種である。「複数人の中で一人で過ごせるスペース」すなわち、他者と時に居合わせ、時に適度に距離をおきながら活動できる空間と関係が強いのは、B-1個人活動中心居合わせ型である。「1人静かに過ごせるスペース」すなわち、EMの勉強部屋やUBの客間のように、他者の目から完全に離られる空間と関係が強いのは、B-2個人活動集中型、B-4短時間登校個人活動型の2種である。また、これら3種のスペースに、新に「授業スペース」を付け加えたが、これはプログラム活動を行う際に使用するスペースをさし、プログラム活動中心型と関係が強い。

5 交流様態と場の構造

表2に表3の結果を重ねると、図26のように4種類の場を抽出することができる。

「積極関わりの場」は、主に、複数人で活動できるスペースで、子ども同士の活発な交流により発生する場である。「関心交流の場」は、主に、複数人の中で一人で活動できるスペースにおいて、他者への関心を示しながら、自分の関心事を行い、あるタイミングで他者と交流が発生する場である。また、この場を形成する子どもは、自分の関心事が「積極関わりの場」などで発生した場合、その場へ参加する準備ができています。「活動充実の場」は、誰にも邪魔されず自分の関心事に時間を使いたい子どもが、主に、一人静かに過ごせるスペースにおいて、自分の関心事に没頭できる場である。「設定の場」は、授業スペースにおいて、プログラム活動により発生する場である。

次に、図27に登校人数に対する空間規模の拡大とともに、4つの場がどのように関係するかを示す。空間規模が小さ過ぎる場合、各場は重なる範囲が大きく、子ども一人一人が自分の意志で場をコントロールすることが困難となる。逆に、空間規模が大き過ぎる場合、各場は重なる範囲がほとんどないため、相互関係が発生しにくく、各場は孤立しがちとなる。登校人数に対して、空間規模が適性な場合、各場は、それぞれが特徴を持って機能する。同時に、各場が重なる領域も生まれ、子ども達は各場を行き来しやすい。

6 まとめ

以上、フリースクールという、子どもの自由な活動に応じてスペースの使用状況が時間とともに変化する環境において、子ども間の交流の様子を、一日の流れの中で詳細にとらえた。そして、その交流様態の子どもが形成する場を抽出するとともに、各場が、空間の規模とともにどのような構造をとるか明らかにした。子ども同士の交流様態

表3 交流様態とスペースの関係性

記号	交流様態	複数人で活動できるスペース	複数人の中で一人で活動できるスペース	一人静かに過ごせるスペース	授業スペース
C	社交型	●	○		
A	選択的交流型	●	○		
D-2	グループ編成型	●	○		
B-3	短時間登校交流型	●	○		
B-1	個人活動中心居合わせ型	○	●		
D-1	グループ単位型	○		○	
B-2	個人活動集中型			●	
B-4	短時間登校個人活動型			●	
B-5	プログラム活動中心型				●

●=関係性強い ○=関係性やや強い

活動充実の場 主に、一人静かに過ごせるスペースにおいて、自分の関心事に没頭できる場

図26 交流様態から発生する場

図27 空間規模別にみた場の構造

は、大きくは4種、細かく9種に分類できる。各交流様態によって、他の子どもへの関心度が異なるため、その関心度によって、1人で活動する場合も、関わる場が異なる。また、フリースクールには、他者との関わりよりも自分の関心事を中心に、1人もしくはグループを形成して過ごす子ども、他者との関わりを求めて登校してくる子どもが

いる。本研究では、子ども達が何を求めてフリースクールに通ってくるかその一端も明らかにできたと考える。同時に、フリースクールの特徴を浮き彫りにすることで、学校教育システムや生徒の活動の相対化につながろう。

7 今後の課題

本研究では、子ども達が形成する場と場の関係を明らかにした。どのような場を重視するかは、各フリースクールの子どもやスタッフが、その時々状況、つまり子どもの登校人数、年齢層、関心事等に依りて決定し、空間に対応させている。今後は、各場と場がいかに巧く関係を保ちながら機能できるか、その境界をいかに計画するか考察することが必要であろう。具体的には、各交流様態によって、使用頻度の高い空間やコーナーがあり、これは、場と場の境界と密接な関係があると考えられる。そして、この点を明らかにすることで、建築計画上の要件を導くことができよう。

また、フリースクールに通ってくる子どもにとって、スタッフの存在は重要と考えるが、子どもとスタッフ、スタッフとスタッフの関係についても言及していない。フリースクールにおいて、子どもは自分の関心事にそって活動するが、スタッフは、子どもを見守る役割があることから、なるべくスタッフ同士が、同じスペースに一緒にいないよう気を配るなど、その活動内容は、子どもとは質の異なったものとなる。次稿以降では、場の境界と空間の関係や、スタッフの活動内容と空間構成の関係について論じてゆく予定である。

注

- 1) 通ってくる子どもやスタッフの活動、子ども間、子どもとスタッフ間の交流などが集積して形成される総体的な場をあらわす場合「フリースクール」、各調査事例がそなえている部屋、コーナーをあらわす場合は「スペース」とした。
- 2) 本研究での「場」とは、子ども、子どもの活動、活動場所、子どもの同士の関係から成る一つのまとまりとする。
- 3) 文献3の8章を参照
「複人数で活動できるスペース、複人数の中で一人で過ごせるスペース、1人静かに過ごせるスペースを提供している。」
- 4) プログラムは、大きく、講義タイプと勉強会タイプにわかれる。講義タイプは、スタッフや非常勤講師が子どもに教える、学校の授業に似た形態をとる。勉強会タイプは、子ども達が話しをしながら自主的にすすめるものである。「なんでもタイム」は、継続的な学習とはべつに、子どもの関心にそって、単発的な活動、たとえば工場の社会見学やハイキングといった、一日がかりの活動を行う。なお、プログラム以外の部分は自由時間である。

(2003年9月10日原稿受理、2004年3月16日採用決定)

- 5) 柿沢らは、文献8において、特別養護老人ホームにおける入居者同士の会話頻度を指標として、誰と誰がグループを形成しているかとらえ、各グループ同士が共用空間において形成する集まりについて論じた。同様に伊藤らは、文献7において、子どもが直接交流を行った、もしくは同席した頻度からグループを抽出している。本研究では、これらの研究方法を援用した。なお、伊藤、柿沢の研究では、グループを定常的な集まりとしてクラスター分析を行っているのに対し、本研究では、定常的な集まりではなく、各日のグループ構造を導くという点で、用い方が異なる。
- 6) 文献7 図3参照。本研究の図7～10と比較されたい。
- 7) 文献3の図10において、フリースクールで子どもが過ごす時間は、短いとみて平均2～3時間程度である。この点を考慮した。

参考文献

- 1) 奥地圭子「フリースクールとはなにか」教育史料出版会 2000
- 2) 読売新聞 2002年9月25日
- 3) 垣野義典、須田真史、初見学、長澤泰「子どもの自主活動の展開とスペースの使用状況-フリースクールの建築計画に関する研究(1)」日本建築学会計画系論文集第561号、pp.121-128、2002.11
- 4) E.ゴッフマン「集まりの構造-新しい日常行動論を求めて」誠信書房 1980
- 5) 古旗安好「集団心理学」共立出版 1973
- 6) 柳澤要「小学校オープンスペースにおける児童の行動領域形成について-児童の行動場面からみた空間解析に関する研究その1」日本建築学会計画系論文集第424号、pp.31-42、1991.6
- 7) 伊藤俊介、長澤泰「小学校児童のグループ形成と教室・オープンスペースにおける居場所選択に関する研究」日本建築学会計画系論文集第560号、pp.119-126、2002.10
- 8) 柿沢英之、石井敏、長澤泰、山下哲郎「入所者のグループ形成とその特性に関する考察-個室型特別養護老人ホームの『集まり』に関する事例研究」日本建築学会計画系論文集第493号、pp.153-159、1997.3

SSプログラム

OSプログラム